
至最弱勇者様!

塚矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

至上的最弱勇者様！

【Nコード】

N4620N

【作者名】

塚矢

【あらすじ】

「おはよーゆうゆう」

そんな風に呼ばれる悠太は高校生！
でも見た目は小学生！

そんな子がいきなり勇者に！？でも戦闘スキルは0
一体これからどうなるの！？

いま、人気の最強物に対抗して最弱もの！

勇者の日常（前書き）

最弱でもいいじゃないか！

改行を少なくしました。

勇者の日常

いい朝……

今日も普通にご飯を食べて高校へと向かう途中の通学路。

「ゆうーたーくーん」

毎日聴かされている猫撫で声が後ろから聞こえてきた。

何故、いつもここで会ってしまうのだろうか。

「実夕、その呼び方はやめてよ！」

「えへへー。だって見た見た目悠太君って小学生だもんっ！ この先に大きい犬がいるから私が守ってあげる！」

痛いところを突かれた。悠太の外見を簡単に説明すると、小学生。

身長は140ぐらいしかなく、童顔で声も声変わりしているとは思えないほどの幼い声だった。中々のイケメンであり、小学校でなら告白されてもおかしくない。美青年というよりは美少年だった。

そんな、悠太は高校ではほぼ全員の女子から、「ゆうゆう」とか、

「ゆうちゃん」とかと、まるで小学校低学年の子供のようなあだ名でしょっちゅう呼ばれていた。

しかし、悠太はそんなあだ名をあまり気に入ってはいなかった。

外見は小学生でも心は立派な高校生なのだ。（自称）

「うるさい！ これから伸びるんだ！ それに、犬なんて一人で平気だもん！」

悠太のしゃべり方も欠点だった。時々、子供が使うような言葉が混じってしまう。

悠太自身はあまり違和感が無いのが悩みどころであった。

「あうー。そんなに怒らないでよー。ともかく学校いこ！」

渋々、実夕と連れ立って学校へと歩く。

実夕は女子にしては身長が高く、173cmはあった。その性格とは裏腹に大人びた顔つきをしているので、小さな悠太と歩いているところを傍から見れば親子といっても疑われないであろう。

長い一本道を歩いていくと見えてくる極普通の高校が、悠太達が通う私立湘南高校だった。

偏差値はそこまで高いわけでもなく低くもない。

何をとっても平凡としか言いようが無い高校だった。

悠太がその高校を選んだのは単に近かったから。

悠太の家からは歩いて20分ほどで着く。

早起きが苦手な悠太にとってあまり時間がかからずに行けるというのは設備云々以前に最重要のことであった。

実夕と登校し、下駄箱に自分の小さな靴を入れ、クラスへと入る。

途端、あちこちから声が上がった。

「ゆうちゃん、おはよ〜」

「ゆうゆうおはよっ！」

「おー、ゆうぼっちゃんまは今日も人気だねー」

上の二つは女子で一番下は男子である。

……くそう、何時かは僕が上から見下ろしてやる！

と、小学校の頃から誓い続けたがいまだ果たせたことは無い。

「だから、その呼び方やめてよお！」

毎日言っているが、効き目はない。むしろ喜んでいる。

「あーん。ゆうゆうが怒った〜」

などとはしゃいでいる女子はもう華麗にスルーするしかないのだからか。

学校での時間はすぐに流れる。

昼休みには女子に囲まれ、あーん、とか言って食べさせようとしてくるが、華麗に断る。

なんか、僕の扱い酷くない……？

全ての授業が終わり放課後のチャイムになるとまた囲まれないうちにさっさと校門を出て行く。

誰にも気づかれぬように素早く俊敏に……

今日は、誰にもバレナイ……

はずだった。

「ゆうーたくんっ！」

……今日もバレてしまった。

「実夕……何で君はいつも僕につきまとうの？」

「だって悠太君だけじゃ心配だもんっ！ この実夕お姉さんに任せなさい！」

「同じ年だよ！！」

いつもこんな単調なやりとりが続く。

毎日、こうやってくる実夕にはうんざりするが、悠太はこの時間が心の奥底では結構好きだった。

実夕とは幼馴染だった。あまり友好的ではない内気な性格だった幼い頃の悠太をオープンな性格にしてくれたのは実夕だった。

その点ではとても感謝している。

そのおかげで、高校でも友達も作ることが出来た。

親は悠太には何も教えてくれなかった。

生まれながらにして小柄だった悠太。

父はバスケの選手、母はマネージャーというバスケ家族だった。

長男の浩二はその恵まれた体格でいまは大学で活躍している。

悠太が生まれたとき、両親は少なからず落ち込んだがこれから大きくなるという希望を捨てなかった。

しかし、次第に年を重ねるにつれても一向に大きくならない悠太に

注ぐ愛情は日に日に減っていき、両親は浩二を寵愛した。

悠太の内気だった性格はそんな両親の影響が少なからずあった。どこと無く余所余所しい雰囲気生まれ育った悠太の唯一心が許せる人物は他でもない実父だった。

そんな物思いにふけていると唐突に話を切り出された。

「そういえば、悠太君って好きな女の子とかいる？」

あまりにも唐突すぎた。

好きな女子かー。

あんまり意識してないからいないかなー

と、答えると、実父はちよつと嬉しそうに微笑んだ。

悠太にはその笑顔の意味が分からなかった。

「そっか！良かったあ」

何が良かったのだろうか？

尋ねてみたが、返答は無かった――

勇者の日常（後書き）

誤字脱字、変な表現ありましたらお知らせください！

感想も待っています！

黒丸（前書き）

今回短めです。

黒丸

翌日。

果たして、昨日の実夕の笑顔はなんだったのか？という疑問は、朝ごはんの大好物の目玉焼きになより脆くも崩れ去っていった。

朝ご飯を食べ終えた悠太は自室へと戻り学校に行く準備をしているところだった。

突然、携帯がブルブルつと震えた。

――誰からだろう？

携帯のディスプレイには、新着メールが1件表示されていた。

差出人は……実夕？

おかしいな。実夕は自分で言ったほうが伝わる！とか主張してメール機能はほとんど使わないはずなんだが……

気になりながらも、メッセージを開いてみる。

――今日、悠太の家の前で待ってて。迎えに行くから。

――

そのメールは短かった。

いつもなら、何も断らずにいつの間にかついてきているのだが、今日に限っては どうして？

なにはともあれ、学校へと向かう準備が出来た悠太は部屋から出て家の玄関で壁に背をもたれかけていた。

2分程待っていると、前方から実夕が姿を現した。

「ごめん！ 待った！？」

「いや、別に。それより、何で今日はわざわざメールを送ってきたの？ 自分勝手な実夕がそんな気の利いたことをする8はずはないと思うんだけど」

「あ！？ 悠太君ひつどおー！ うえーん、悠太君がいぢめるよお」

といって泣きまねをしている実夕に問いかける。

「で、何でわざわざメール送ったの？ 後、その呼び名やめてよね！」

「んー……悠太君に言いたいことがあるの」

そういうと、実夕は急にさっきまでのおちゃらけた雰囲気から真面目な顔へと変わった。

「あ……あの、ね？ そのお……」

「何だよ、はつきり言つてよ！ いつもの実夕らしくないじゃん！？」

「あ、あの、ね？ わ、私、そのお……悠太君の事が……す……！！」

実夕が言い終えるか言い終えないかのうちに、実夕の身長が縮んだ。いや、縮んだのではない。地面に引き込まれていく。

「実夕！？」

実夕が立っていた場所には大きな黒い丸があった。

「実夕！？ 実夕！！」

「ゆ……悠太君、これ、何？」

実夕が恐怖に顔を歪めながら尋ねてきた。

そんな……

考えているうちにも実夕の体はどんどん黒い丸の中へと沈んでいく。

「実夕！！」

実夕の腕を掴み引つ張りあげようとするが、びくともしない。

「悠太君……」

もう、涙目になん変わってきている。

そんな気弱そうな実夕は今まで見たことが無かった。

どうする？ 何としてでも助け出さなければ。

焦りがどんどんと悠太の思考力を奪っていく。

どうする？ ……どうする！！

実夕の体は見えなくなり助けを求めようと伸ばした手しか見えなくなっている。

くそっ！！こうなりややけっぱち！

実夕の手を掴み、自分も一緒に黒い穴に飛び込む。

黒い穴は実夕を沈めたように、悠太を静めていった。

悠太の体も飲み込んでしまったとき、実夕と悠太の思考は停止した。

悠太……悠太……

まだ、私言ってないよ。

悠太の事を好きだって……

そして、実夕の思考はまた混沌とした。

—————どれぐらい経ったのだろうか？

実夕は気がつくと自分が知らない場所にいた。

横には悠太が倒れている。

「悠太！ 悠太！！」

実夕は悠太を抱き起こし、揺さぶる。
しばらくすると、悠太が不快そうに、呻きを上げた。

「ん、むう……」

「悠太！ 大丈夫！？」

「んみゅう……実夕……」

「悠太！？ 気がついたの！？」

「……お腹いっぱい……」

んなつ！？

……許さない

その後、悠太の頬が真っ赤に腫れたのは別の話だった。

黒丸（後書き）

誤字脱字があれば指摘お願いします。

此処は何処？（前書き）

ちよつとがんばって書きました。

此処は何処？

……頬が痛い

「実夕……？」

「悠太君？」

右頬の痛さで悠太は目が覚めた。視界一杯には実夕の心配そうな顔が広がっていた。

いつも強気な実夕を見ていたけれど、さっきからこんな顔ばかりだ。何か調子が狂ってしまう。

そして、今自分たちが置かれている状況に気づいてしまった。

「実夕、此処は何処なの？」

「……私にも分からない」

悠太達が今居る場所は薄暗い、灰色の壁で出来ている建物のようなった。

部屋の隅へは下へ行く階段と上へと続く階段があった。

とにかく、ジツとしても始まらない。

「実夕、とりあえず外へ出てみない？」

「ん、そうだね」

実夕に承諾された。外へ出るには、常識的に考えれば下へ行って1階へと辿り着けば出られるはず。

そう思い、足を下へと続く階段へと向かわせる。

階段は、暫く使われていなかったかのように埃を被っていた。

しかし、なんだったのだろうか。

あの、黒い丸の穴は。

いきなり出てきて自分たちの体を飲み込んで行くだなんて尋常じゃない。少なくとも、悠太は見たことが無い。これが、超常現象というやつだろうか？

実際、悠太も事実を受け入れ切れてはいない。

何を確かめるにもここを出て外の様子を見ないとここが何処だかすらわからない。

カツカツカツと階段を降りて行く。でも、下へはつかない。

「ねえ、いつまで続くのかなこの階段」

「わからない」

降りても降りても下の部屋につかない。

こんなのありえない。おかしい。

神社の石段ではあるまいし。もう200段以上は降りている。

「ねえ、ここ、何なの？ 何で着かないの？ 悠太君、私、怖いよ

……」

実夕が弱気になる。目は、早く此处から帰りたい！と主張していた。

「実夕、弱気にならないでよ。いつもの強い実夕でいて。僕を守ってくれるんでしょ？」

実夕を励ます。というより、奮い立たせる。此处で実夕に弱気になられては敵わない。

「そうだよね……うん！ 私、どうかしてた！！ ようし、私が守ってあげるからね！！ さあ、気を取り直してドンドン行こう！

」

そういつて実夕は歩調を速めた。

うん。実夕にはうるさいぐらいがちょうど良い！！

更に、スピードアップし降りていくうちに悠太はあることに気づいた。

階段には足跡がすでに残っている。

そして、ある仮定へと辿り着く。

「……………僕たちは同じところを歩いているんじゃないか……？」

もし、本当にそうだとしたらこのままでは埒が明かなかった。実夕を呼び止める。

「実夕」

呼びかけて自分の考えを実夕に言ってみた。

「ええ！？　じゃあ、私たちはずっと同じところを歩いていたの！？」

それを聴いた瞬間、実夕の顔を疲労が覆った。

でも、絶対に出口はあるはずだ。

「実夕、これからただ降りるだけじゃなくいろいろな注意しながら降りよう」

そう提案し、実夕もそれが良いと思ったのか頷いてまた歩き出した。今度は、慎重に。

5、6分経った頃だろうか。

早速、効果が現れた。

実夕が、突然、

「あっ！」

といって立ち止まった。

「実夕、どうしたの？」

「見てよ、これ」

実夕が指差す先には灰色の壁があった。

「何も無いよ？」

不思議そうに尋ねると、実夕はニヤアツと笑ってこう言った。

「もっと、よく見てみてよ」

顔を近づけてみる。

何か、数字が並んでいた。

でも、よく見えない。ふうっと息を吹きかけてみる。途端にブワッ

と埃が舞った。

「ゲホッゲホッ！」

埃を思い切り吸い込んでしまい咳き込んだ。

「もおゝ何やってんのよ」

実夕が呆れたという顔で見てきた。

「ほら、みてここ！」

実夕が指差す先には数字の式が羅列していた。

「 $+1 - 2 \ 3 + 5 - 4 + 2 - 5$ 」

声に出して呼んでみたが意味はさっぱりわからない。

実夕も隣でうゝんと唸っていたが、突然パッと閃いたとうように顔を輝かせた。

「ふっふゝん。私って天才かも！」

「天才はテストで20点を取りません」

「うつ！？ 古傷を突かれた……」

ハアと溜息をつく。

「幸せが逃げるよ？」

「余計なお世話だよ！」

「フフツ、悠太君かーわいいゝ、まあ、ここはお姉さんに任せなさい！」

つんつんと頬を突付いてくる。

…… 本当に大丈夫かな？

実夕は1段上へと上る。

「実夕？ 戻ってどうするの？」

「いいからいいから！ 悠太君も私と同じ動きをして」
言われたとおり1段上へと上る。

その後も実夕は同じような動作を繰り返す。

上がったかとおもいきや、今度はドンドン下がる。そしてまたちよつと上がってちよつと下がる。

「実夕、僕をからかっているの？」

いい加減うんざりした僕は少し苛立ったように言葉を吐き出す。

「そんなことないわよ。これで最後」

そういつて下に下がる。

何が最後なんだか、悠太にはわからなかった。

実夕の後へ続いて階段の下へと降りていく。そして実夕が止まった場所で僕も立ち止まる。

……え？

さっきまで見えなかったものが見えてきた。

「壁が……」

さっきまでこんな穴は無かった。

どうなっているんだ？

実夕の推理が正しかったということなのか？ 何故か、悔しい気持ちになってくる。

灰色の壁には黒い丸がぽつかりと空いている。

何処かに続いているんだろうか？

「実夕……どうするの？」

「行くしかないでしょ！！」

実夕は、自分の推理が正しかったので気を良くしたのか上機嫌である。

そういうと、実夕は黒穴の中に足を入れる。

「悠太君も早く！！ いくら私でも一人はヤダ。はぐれないように手、繋いでね？」

そういつて実夕が手を差し出す。

僕は、その手を掴み勢い良く黒丸の中へと入っていく。

そしてまた、黒穴に落ちたときのように意識が薄れていった。

- - - - - 「おめでとうございます」

抑揚の無い声が僕の耳へと入ってくる。

目を開けるといつのまにか、そこはさっきまでいた場所では無くなっていた。

此処は何処？（後書き）

誤字脱字があれば指摘お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4620n/>

至上最弱勇者様!

2010年10月9日12時49分発行